

名、又久志之渡○渡恐誤者、因日神之靈異而得此名、靈異二字、和語曰久志備也、

〔日本紀神代抄三〕天浮橋トハ、虚空ヲ指シテ云也、○中略假令水上ハ、虚空ト同ジ、其上ニ橋ヲカケ

テ交通スル事、此二神ノ通力ヨリ心ヲ得テ橋ト云事ヲバ出キタリ、サレバ行幸ノ道ニ必浮橋ヲカクル事、此因縁也、

〔古事記上〕天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命二柱神、修理固成、是多陀用幣流之國、賜天沼矛而、言依賜也、故二柱神立○註天浮橋而、指下其沼矛、以畫者鹽許袁呂許袁呂邇○註畫鳴○註而引上時、自其矛末垂落之鹽、累積成島、是淤能基呂島、

〔古事記傳四〕天浮橋は、天と地との間を、神たちの昇降り通ひ賜ふ路にかゝれる橋なり、空に懸れる故に浮橋とはいふならむ、和名抄に、魏略五行志云、洛水浮橋、和名字岐、波之とあるは、水上に浮たるなれば異なり、天忍穗耳命、番能邇邇藝命などの天降り坐むとせし時も、天浮橋に立しこと下に見えたり、○中略丹後國風土記曰、

與謝郡那家東北隅方、有速石里、此里之海、有長大石、前長二千二百廿九丈、廣或所九丈以下、或所十丈以上、廿丈以下、先名天梯立、後名久志濱、然云者國生大神、伊射奈藝命、天爲通行而梯作立、故云天梯立、神御寢坐間、仆伏云々、此に因ば、此浮橋もと此神の作り坐しなり、さて天に通ふ橋なれば、梯階にて立て有しを、神の御寢坐る間に、仆れ横たはりて、丹後國の海に遣れるなり、こは倭の天香山、美濃の喪山などの故事の類にて、神代にはかゝることいと多し、後人儒者心もて、勿あやしみを、又播磨國風土記曰、賀古郡益氣里有石橋、傳云、上古之時、此橋至天、八十人衆、上下往來、故曰八十橋、これも天に往來し一の橋と見ゆ、神代には天に昇降る橋、此所彼所にぞありけむ、是を以て思へば、彼御孫命の降りたまふ時立し、は、此處天浮橋と一にはあらで、別浮橋にぞ有けむ、

〔日本書紀二神代一〕一書曰、○中略天照大神、以思兼神、妹萬幡豐秋津姬命、配正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊